

特集 家族と家庭

●出典：「育てる」通巻240号 昭和63（1988）年6月25日発行

家庭のルール

賀集 時子（神奈川県）

「家庭」というと、漠然としてとりとめのないような気がします。家族が生活する理想の場への過程と考えてみてはどうかと思います。そう考えますと、かてい・をより素晴らしいものにするために、わが家なりのスタイルとか、心がけが浮かんできます。それは何となく、ルールという言葉がピッタリと当てはまるような気がします。家族が、ひとりひとり同じ屋根の下で暮らしてゆく上での決まりというか、紳士協定です。まず、第一のルールは、家族はみんなが対等だとい

うことです。長男が九才、長女が五才。二人の人格をなるべく尊重してあげたいのです。こう書きますと、それは甘やかしだという声が聞こえてきそうですが、大事な点は、まず子供たちを一人前として扱うことで、本人の責任感、自立心が育つのではと思うからです。子は親に従うとか、大人が子供を教育するという図式でなく、親は子供たちと同じ目の高さで話をし、一緒に物を考えたいのです。そうすれば、子供たちの姿もよく見えるし、子供たちだつて、きつと、親の目の高さで物を考えるようになると思っています。

子供たちとコミュニケーションをはかろうとするあまり、学校での出来事を根掘り葉掘り質問した時もありましたが、そんなことは、子供には返つて煩わしい



ばかりですし、親たるもの、子供の顔つきを見て判断ができないようでは、一人前の母親ではないな、と気がついてやめるようにしました。普段からさりげなく見ていれば、その子のしぐさから自ずとわかるものだと思います。たとえ間違ったことをしたな、悪いことをしたなと、わかっていても、口に出さないようにしています。我慢です。子供の方だって、知らん振りをしてしながらも、内心は親に見破られたな、とわかっている筈ですから、時間がかかっても自分で考えさせること、そこに進歩があると思うのです。この、つい言いたいことをグツと我慢するのはつらい所ですが、叱ってみても親の溜飲^{りゅういん}が下がる分だけ、子供の欲求不満もつのりますし、動機付けにはなりません。アドバイスをして、子供の依存心が生まれるだけで逆効果、なるべく、気がつかない母親を演じるのです。いい意味での放任主義、ここが母親の腕の見せ所ではないかと思うのです。

第二のルールは、自分の子とよその子を比較しないようにしています。子育て論があふれ、よその子が気になります。でも、比較には解決の道がないと思うの

です。子供にだって失礼です。情報が多ければ多いほど、惑わされずに見て見ぬ振りが大切な気がします。言いかえれば、減点主義でなく、加点主義です。できないことを考えるより、できることを考える方が子供は自信が持てますし、親だって気が楽になるものだと思います。

次のルールは、無駄なことを大切にしたいのです。歯を磨いたりするのが生活習慣としたら、この時期には心の生活習慣といったものも身につけて欲しいからです。好きなこと、熱中することが見つければ、これから先の人生がどんなに素晴らしいことか、ですから、子供の興味の対象になるものには骨惜しみせず、付き合ってやりたいと思っています。そこから、小さなものへの思いやり、年長のものが果たさなければならぬこと、あるいは向上心といった基本的な心の習慣を学ぶのだと思います。

たまたま、先日、子供二人で自転車で遠乗りに出かけた先で、子猫を見付けた時の話を聞かせてくれました。いつもは喧嘩^{けんか}ばかりしているのに、その時は一致団結、妹が子猫を見守っている間、兄は山を駆けおり

て、お小遣いで牛乳を買ってきて子猫の面倒をみたそうです。子供の頃には、誰でも似たようなことをした思い出があるものですけど、こんなありふれたことを、汗をかきかき二人でしたことが嬉しいのです。

子供の頃から、CATやDOGを憶えさせるのも結構ですが、それよりも違った言葉、違った物の考え方をしていることを知って欲しいし、あれもこれもというよりも、一度に沢山のことはできません。ひとつを手に入れば、もうひとつは人と、分かち合わなければいけないことを学んで欲しい。その子が、本当にやる気があつて、興味があれば、大いに塾通いもさせればいいと思います。でも、そうでない子に強いるのは、これは親の代償行為ではないでしょうか。親ができなかったことを子供にさせたいと思う気持ちを押さえること。反対に、お父さんみたいになつて欲しいと思わないこと？です。親は親の人生を生きてきたのですから、子には子の人生があります。ですから、わが家では、なるべく立派なお父さん、お母さん風を吹かせないようにしているつもりです。

そのせいか、わが家は、朝はバラバラ、家族が揃う

のは数えるほどです。子供たちもマイペース。同級生が勉強に励んでいるというのにどこ吹く風。自分はフオークボールの投げ方の練習に熱中しています。

わが家の理想の家庭への過程は、ほど遠いのかも知れません。

十八才の坂

森永 純枝（埼玉県）

子どもの頃を思い出してみると、そこにはいつも天井を見上げて寝ていた私と妹の姿があつた。

祖母が結核で数年間療養したのち私が小学一年の秋に他界した。その感染のため私たち姉妹は以後三年余りの大半を病床で過ごした。母は亡き祖母から引き継ぎ私たちの看護に追われた。

私は食べることより好きな絵を描くことに没頭した。疲れると横になり窓から樹々を眺め、雲を眺めた。それらがさまざまのかたちに見えてくる。そこから次々に空想しては自分だけの「お話」の世界をつくって遊

●出典：「育てる」通巻242号 昭和63（1988）年8月25日発行

ぶのが常だった。

おてんばで木登りが好きな妹にとって、じつと寝ていることは私よりずっと苦痛だったにちがいない。少し元気になるのと近所の子どもたちとかけ回っていたが、度を越すとすぐに熱が出てしまうのだった。

枕を並べて寝ているのに飽きてくると、ふとんが触った、本が手にぶつかった、などともめはじめ。なかなかおさまらないと母は黙って傍へ来て、ひとり分のふとんの裾を持ち上げ、寝ている娘ごとくると方向を変えてしまう。しばらくは二人とも静かになるが、やはり隣が足ではつまらない。枕を高くして自分の足もとと並んでいる顔に向かって話しかける。やがて二人で元通りにふとんを並べ、仲直りしてしまうのだった。

私たちはよほど体調がよいとき以外、入浴すると疲れるのかたちまち高度の熱を出した。母はよく蒸しタオルでからだを拭いてくれたが、うだるような暑い日には「焼け石に水」だった。そんな夏の夜、あけ放した窓にあお向けのまま足をかけ、母たちの部屋からものはる明かりをたよりに垢あかでまっ黒になったかかとをは

がすのに熱中したことがあった。まっ黒い垢がひび割れていてひつかくとポロリととれ、その下から白い皮ふが現れた。母にみつかると「そんなこと気にしないでいいの。それより早く元気になることよ」と諭されたが、やはり気持ちが悪い。寝たふりをしながら妹と二人でこつそりとはがした。

時おり母は「きつと寝ているのよ」と何度も言い、「約束してね」と懇願するように二人の顔をみて外出した。うんざりしている寢床から私たちは「ほんのちよつと」のつもりで起き上がる。たまたま近所の友だちがのぞきに來たりすると「ほんのちよつと」のつもりで遊びはじめのだが、やがて部屋中に寝ていたふとんや毛布などを敷きつめ、ままごとに興じてしまう。

ガラガラ……と玄關の戸の開く音がしてハツと気づき、大慌てでふとんを元の位置に戻し、おもちやを片づける。その間に友だちはサァーッと帰ってしまう。もちろん母の姿が目の前に立つまでにすべて元通りになるはずはない。母は床についた私たち二人の顔を見ながら「あんなに寝ているのよって言ったのに……」と言ったきり、あとは涙声になってしまう。母を泣かせ

てしまったことに自責の思いにかられ、妹と二人「ごめんさい。こんどはきつと約束するから」と謝る。そんなことが幾度かあった。

四年生になる頃から少しずつ健康をとり戻し、十四、五才の頃には二人とも病の影さえ見当たらないほどになった。

二十才をいくつか越えたある日、母は私たち姉妹にあの病は重く、医者から「十八才まで生きられるかどうか…」と危ぶまれていたと話してくれた。

「でもね、十八才まで生きればあとは大丈夫、とも言われたの」。そうだったのか。妹も間もなく二十才になろうとしていたその日。母は文字どおり「もう大丈夫」と思い、私たちに話してくれたのだろう。

そのとき、私たちが母との約束を破って遊んでいたことを知った母の叱るよりも泣いた顔や、かかとの黒い垢を「気にしなくていいの、それより早く元気になつて」と言ったことが思いだされた。

子の命の短いことを宣告されながら育ててきた母の、あの頃の心中はどんなであつたろうか。それは当然のことながら私が親となつてはじめて察することができ

たのだった。私が娘のことで思い悩むとき、母に話すと最後にはいつも「いいじゃないの、からだが丈夫なら」と言う。そう言われるたびに（そうなのだ）と思ひ直す。

最近、母はこう言った。「あなたが四十才の半ばを越えるまで私が生きていようとは、思いもよらなかった。もうすぐ七十才になるなんて…」

戦時中の苛酷な時代を生きのび、戦後の業もろくにない時代に祖母や私たち姉妹の看護に明け暮れた母の、それは実感なのだろう。

私にとっては、十八才を越えてからの人生は「余^よ碌^{ろく}」なのだと思ふと肩の力がぬけ、ありのまま、生^きのままでいることができ幸せである。

わが娘は、こんな祖母と母の思いを知つてか知らずか、一日一日を思ふ存分健康を満喫しながら思春期まつただ中をつつ走っているようだ。

●出典：「育てる」通巻177号 昭和58（1983）年3月25日発行

記号として見えている、見られている

斎藤 久雄（中学校教諭）

「今の子どもと昔の子とはどちらがものを知っているか」と聞かれれば、だれでも今の子だと思う。しかしほんとうにそうだろうか。理科の教師からこんな話を聞いた。単子葉植物・双子葉植物についての授業で、「稲や竹の葉脈はタテに通っていて、櫟や桜とはちがう」と言ったところ生徒から反応がない。

「みんな七夕でつかう竹の葉は知っているだろう」

依然として反応はゼロ。

「じゃあ薄は知ってるだろう。薄の葉は……」

生徒は口々にガヤガヤ始める。聞いてみると彼らはたしかに薄は知っている。十五夜の時の穂がパランと開いたものを。でも葉っぱまでは気をつけて見たことがないというのであった。

その授業ではおしまいに、寿司についてくる笹の葉と桜餅の桜の葉で合点が行ったのだが……。

この「薄は知っているけれど、葉っぱまでは」という

言葉はだいたいな意味をもっている。子どもたちの知っているのは薄ではなくて薄の記号なのである。

昔の子どもが知っていたのはフチにギザギザのある、うっかりすると指を切る、折ろうとしてもなかなかぎれない、青くさい汁の出る草なのだが、今の子どもの薄はパランと開いた穂先だけらしい。

記号というのはもちろん実物とは違う。公衆便所には男女を区別する人ガタが描かれているが、あれを何千回見ても男・女を知ったことにはならない。

ほんものではなく記号として子どもの頭に入っているのは、「物」だけではなく「人」もそうである。彼らが眼にする「つつぱり」にも、浮浪者にも、外側に見える頭髮や服装のほかに、自分と同じ劣等感や悲しみがあるとは思っていない。テレビのカッコイイ人物と同じに、パランと開いた穂先しか見えない。

幾何学の点というのは厚みも広さもない位置だけを示すしるしなのだが、こうした記号知識の寄せあつめから、植物に対する興味や人に対する思いやりが出て来るものであろうか。

善い悪いという価値観の基礎には愛がある。「人に

迷惑をかけない」というのも、そのもとに他者の存在についての愛や認識がなければ説得力はない。

そのかんじんな認識自体が記号の寄せあつめでは善悪のけじめもはっきりしなくなる。

子どもがうまく育たないのは家庭・学校のせいだと言われているが、その教育以前に子どもがうまく育たない要素が組み込まれている。

言い聞かせるとわかるのか

私は長年教師をやつて来て、本来親や教師の言うことは子どもには通じないものだと思つている。ところがたいていの大人はじっくり話さえすれば子どもはわかるものだと思つている。そうして幼児にさえ理屈で説明するのがしつけ方の基本だと思つているように見える。

大学時代に「論理的思考力の発達」というリポートを書かされ何冊かの本を読み漁つたが、子どもの考えは情緒的・自己中心のことが特徴で、論理的にものを考えることができないのが14歳ごろだと知り、自分で予想していたより遅いのおどろいた。

理屈が通じないなら何が通じるのであろうか。

親との面談でこんな話が出た。

「A君はよくお父さんと話すようですね」

「よくつて、子どもも主人もあまり口数は多い方じゃないんで。でも夕食の時はたいい何かボソボソ話しています。うちの子は塾のある日は帰りが八時半になるんです。だから主人の方が早いですけど、『もう夕飯をつけましょうか』つて言うといや、待つてよう』つてお酒をチビチビやつたりして」

子どもの考え方が情緒的であるからと言つて、それは話し方をナニワ節でやれということでもなければベタベタしろということでもない。子どもにとっては論理的にスジが通つているかどうかより誰がどんな気持で話すかということの方にウエイトがかかつているのだと思う。

先日電車に乗つたら、向かいの席に子どもとその両親が坐つた。そのうち子どもが吊革でブランコを始めた。母親が何回か注意したが子どもは知らん顔をしていた。靴の先がシートにあたつて泥がついた。しばらくして父親が「おい車掌が来るぞ。電車から降りろつて言うぞ」と言つた。子どもはブランコを続けた。

昔はよく母親や年よりが「おまわりさんが来ますよ」と言った。最近では父親も「厳しくしてやって下さい」なんて言う。しかし厳しいかどうかの前に「今はやつても良い」「それはいかん」という価値判断を避け、他人まかせにする父親を子どもは信じることができるのであろうか。

親の眼・教師の眼

教師の心配が親に通じないことがままある。それは子どもの顔がうちと学校とは違う（ネコをかぶっているのではない）からなのだが、家庭では集団の中ほど変化がつかみにくいからだと思う。だから初め「そんなことが」と言っていた親が、あとになって家庭での変化に気づいて「どうしたら良いでしょう」と相談に来ることが多い。

これは別に教師がえらいわけではない。集団の中で子どもを見れば誰にだって見えることで、それを「先生はウチの子を色眼鏡で見ている」とか、「うちの子は先生に嫌われているのじゃないか」と心配してはじまらない。

しかし「集団の中で」という観点にも限界はある。

それは診断ではあつても治療につながるとは限らないという点である。子どもが教師の説得だけで良くなることはめつたにない。生徒集団との関係でよくなるのだがその集団を構成するのがむずかしい。集団の中で他の生徒とくらべて観るということ自体にマイナスの要素も含まれている。

私の教え子の中に今年二十四歳になる女性がいる。彼女は昨年結婚を申し込まれて交際していたのだがそれを解消するらしい。相手の青年には会ったことがないが、たいへん良い縁談だと聞いていたので、なぜだかたずねたところ、

「私のわがままかも知れないんですけど。あの人は私をいつも誰か他の人とくらべているんです。テレビのタレントとか、妹さんとか、たいていは私をほめているんですけど……。それはわかっていても何となく気が重くて」と言った。

他人とくらべられるだけでは人は心を動かさぬものらしい。問題行動を起こす生徒も「人の迷惑だから止める」といったのでは変わろうとしない。

彼らも記号として見られるのはいやなのである。

再掲載を受けて――

家族

吉澤かおり（現・山村留学指導員）

「家族と家庭」。なんてざっくりとしたテーマなんだろう、思いながら記事を読んだ。様々な家族の形、様々な家族の思い、様々な家庭のルール。記事を読んでみると、私にもこのテーマで自由に記事を書いていいと言っているように聞こえるから、家族をテーマに自由に書きたいと思っている。

私の家は、高原野菜の専業農家である。父と母、弟妹が三人いて、そして常に厳しい祖母がいた。戦後、夫を戦死で亡くした祖母は、親戚と再婚し、四人の子どもを育てた。私の家があるところは標高一三〇〇mもあり、今でこそ人並みに生活しているが、きつと祖母の若い頃は大変な地であつただろうと思う。さらに耕して野菜を育てる土地もそんなにあるわけではなかったようで、とつても苦労したと聞いている。再婚した夫も早くに亡く

なり、祖母は一人でたくさん苦労したんだと思う。だからなのか祖母は私たち孫にも厳しかった。「水がもったいない」「電気がもったいない」「ちゃんと正座して食事をしなさい」「お茶碗をもって食事をしなさい」「食事はだらだら食べない」お風呂から出た時、タオルで拭かずに出たことがあつた。祖母がそれを見て「この家は誰が建てたと思ってるんだ。そんなびしょびしょで歩くなー。」と怒られた。何より「よそ様に迷惑をかけないようにちゃんとしなさい」と言われた。祖母は、孫が十五人いた。孫たちからは「くそばばあ」と呼ばれているほど厳しい祖母だった。しかし、孫たちはそんな「くそばばあ」がみんな嫌いじゃなかった。やつぱり誰よりも私たちのことを色々心配してくれていたのは祖母だったし、たくさん苦労してきた祖母の話はやつぱり正しかったから。

祖母の料理は決してそんなに豪華なものではなかった。しかし、朝早くから畑に出ている母の代わり作ってくれた朝食の甘じよっぱい卵焼きが美味しかった。学校から帰ってくると、冷ご飯がまん丸に握られていて、「お腹空いてたら、それを焼いて味噌漬けて食べろ」と

いう祖母の焼きおにぎりが美味しかった。ゲートボールへの差し入れにと、祖母が小麦粉に味噌とネギ、みかんの皮を入れて焼いていた味噌せんべいが美味しかった。こうして思い出してみると、自分でも思っている以上に祖母の味が染みついていたし、あれがまた食べたいな。と懐かしく思えた。自分でも作ってみるも、やっぱり同じ味はなかなか出せない。祖母が生きているときにもっと教えてもらっておけば良かったと思う。結局、いなくなつてから後悔しても遅いが……。

亡くなるまでは当たり前と思っていた存在もこんなに大きいものだったと初めて感じたのは三十歳になったころだった。若いころ苦労した祖母も、最後は四人の子どもたち、十五人の孫たち、そして十五人の曾孫に囲まれてこの世を去った。一人で子どもたち四人を抱え大変な時代を生きたために苦労してきた祖母はきつと最後幸せだっただろう。祖母の部屋には「努力と根性」という額縁があった。祖母は常にこの言葉を胸に生きてきたのだろう。よく言われたなど、今でも母屋にあるその額縁を見ると祖母を思い出す。

山村留学指導員として仕事を始めて二十年になる。こ

れまでいろんな家族、家庭を目にしてきた。そしてこの現場もまた大きな家族である。時代が変わり家族の形も色々変わってきているから、私の家族像を押し付ける気は全くない。子どもたちは色んなものを見て、色んな人と出会ってこれからの未来があると思っているから。私もその一人で、厳しい祖母に育てられた私は子どもたちにとつてくそばあかもしれない。でも、一年ぐらいそんなくそばあと一緒に暮らしていこう。



イラスト 金子実夏